

## <子ども未来・スポーツ社会文化研究所 2024 年度年報論文>

### 電鉄広報誌に見る郊外における「少女」のイメージ —『郊外生活』『山容水態』を通じて—

(2024 年 8 月 28 日受付)

談 韶 (関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻)

#### はじめに

本研究は、宝塚歌劇団における「少女」性の消失の歴史的研究の一部を構成するものである。宝塚少女歌劇団が郊外で成立し、1940（昭和 15）年に「宝塚歌劇団」へと改称し、今日まで続けられている。宝塚歌劇団はなぜ都市ではなく、郊外で成立したのか。特に阪神間ににおける郊外は、自然なものではなく、小林一三の「郊外」戦略によって造られたものといつてよい。

小林一三の「郊外」戦略とは、箕面有馬電気軌道(以下「箕面電車」)の開業とともに、箕面公園、宝塚歌劇団を通じて文化空間を、そして豊中グラウンドによってスポーツスペースを作り、郊外における健康的、衛生的、文化的生活スタイルを提供する戦略のことを指す。宝塚歌劇団もまたその一環として誕生した。初期の名称が宝塚少女歌劇団であったように、戦前の宝塚歌劇団には「少女」性が求められていた。

そこで、本研究では、郊外と少女の関係、あるいはその二つが節合された結果生まれる意味について考え、明らかにすることを課題とし、その分析材料として、阪神電鉄の広報誌『郊外生活』と箕面電車の『山容水態』を用いることにする。

竹村民郎（2010）においては、阪神間郊外における新しい民主的女性、特に主婦の役割と消費活動に注目しており、先駆的で数少ない研究であり、また本研究で扱う広報誌『郊外生活』の内容を分析している。そこでは、阪神間における「交通文化圏」の形成とともに、女性たちの生活の場としてその活躍を明らかにしている<sup>1</sup>。しかし、彼は「少女」や「少女文化」について特別に目配りをしているわけではなく、むしろ「主婦」の役割と消費活動を重視しているし、その女性たちが広報誌に登場する意味を考察しているわけでもない。一方、フェミニスト地理学の分野においては女性の通勤行動と居住地選択などの問題が

<sup>1</sup> 竹村民郎（2010）「文化環境としての郊外の成立」『大正文化 帝国ユートピア』三元社、251～258 頁

注目され、非対称に構造されたジェンダー関係がどのように空間に映し出されるかを中心に研究が展開されている<sup>2</sup>。もちろん、これらの研究は、日本近代における「ジェンダーと地理」を対象としているわけではない。

また、「少女」に関する研究は、日本近代における「少女」の生成、「どのような文脈上にあり、どのような意味を持つのか、あるいは、表象のあり方や変容の過程、様々な場におけるジェンダー配置の力学を分析する作業」<sup>3</sup>がメインであり、「少女」が郊外という特定の空間と結びつけて考察する研究はこれまで見当たらない。さらに、少女文化研究においては素材として少女雑誌のほかに、例えば吉屋信子の小説などの文学テクストや竹久夢二の図像テクストを用いているが、本論のように広報誌を取り扱った研究もこれまでにはない。

さて、両電鉄の広報誌は日本における大変早い時期の広報誌であり、もちろん電鉄会社としては嚆矢といえる。企業広報の嚆矢は1897年刊行の丸善による『學鎧』とされ、続いて三越の『時好』(1902年)、明治屋の『嗜好』(1908年)とされているので<sup>4</sup>、この両電鉄は、ともに日本の企業広報としてかなり早い時期から広報誌を活用していたことになる。

『郊外生活』では郊外の豊かな自然と文化的生活の象徴として「園芸」が取り上げられるが<sup>5</sup>、それ以外では子ども教育に適当な場所であるポイントも強調している。さらに、「少女」に関する挿絵、「女学生」の写真なども多く掲載している。箕面電車の広報誌『山容水態』もまた、『郊外生活』のほどではないが、郊外で活躍する若い女性や宝塚少女歌劇団の紹介などを行っている。

『郊外生活』及び『山容水態』を通じて「少女」「女学生」の健康的、衛生的な環境で育つべきイメージを作り上げた。あるいは、当時拡大しつつあった「少女」のイメージを利用して、郊外の良さを喧伝していったともいえる。「少女」は男子とは違い、煙灰の都市とは似合わず、緑豊かで、空気も澄んでいる郊外こそが「少女」の精神と身体に良い。さらに、登山、園芸などの活動を通じて「少女」たちの高雅な趣味と強健な体を養う。この郊外の教育環境としての良さは当時、活動力と積極性を求める女性教育の思想と合致した。このようなイメージ形成は後に女学校が郊外への設立あるいは移転を促していく一因ともなった。

<sup>2</sup> 吉田容子 (2006) 「地理学におけるジェンダー研究—空間に潜むジェンダー関係への着目—」『E-journal GEO』第1巻、22~29頁

<sup>3</sup> 水谷真紀 (2009) 「研究動向 少女」『昭和文学研究』第59巻、84~87頁

<sup>4</sup> 三島万里(2016) 「広報誌を読む」文化学園大学紀要47集、2頁

日枝智樹(2017) 「世界の広報史と日本」『広報研究』第21号、8頁

<sup>5</sup> 黒田勇(2021) 『メディア スポーツ 20世紀』関西大学出版部

## 第一章 私鉄の拡大と郊外

### 第1節 郊外とは

まず、本稿で用いる「郊外」について、いくつかの定義と解説を整理しておく。

若林幹夫（2001）は「ジャーナリズムや現代文化論、文化批評や文芸批評、文学やアートの世界においては「郊外」は単なる場所ではなく、「人びとの生の形や意識、土地や空間の物理的な形態、都心部との地理的関係、そこでの社会的諸活動を支える鉄道や自動車や電話などのメディア等が複合して構成する社会的な場、固有の対象性と属性をもった社会的事実として見出されている」<sup>6</sup>と指摘した。彼は「郊外」の語源を探り、「郊外」を考えるときに、「独立し、完結した」ものとしてではなく、都市と比較的に捉えなければならないと同時に、「もっぱら近代化の過程で社会の地形の中に、社会的であると同時に歴史的なものとして現れた」と指摘した。つまり、「私たちが知るような「郊外」は、近代以降に「近郊」が「郊外化」してゆく、社会の地形の構造的な変動の中から現れたの」という捉え方をしている。

日本の郊外住宅地の嚆矢は、明治40年代から阪神間で阪神電鉄と現阪急電鉄によって、健康的な郊外生活を謳って競うように開発されていった分譲住宅地に見出すことができる<sup>7</sup>。若林によると、「これらの住宅地は単なる「近郊の住宅地」として開発されたのではなく、都心部の環境の変化やそこで働くホワイトカラー層の増大を受けて、固有の意味を帯びた場として生産され、その後の日本の郊外開発におけるモデルとなっていました。そしてその時、郊外開発の「軸」をなしていたのが、阪神、阪急、玉川電車、目蒲線等、都心から近郊へ延伸していく郊外電車であった。こうして日本において「近代都市」が成立していくこの時代に、日本における「郊外」の原トポスが成立し、集合的な現象として東京・大阪周辺に生み出されていったのである。」

若林の分析から、「郊外」の特徴について、次のようにまとめることは可能だろう。まず、鉄道によって都心と結ばれ、通勤と通学可能ということは重要な要素である。そして通勤・通学のために交通費を払える新中間層が選び出され、職住分離の生活を送るようになった。そして、同時に、通勤・通学によって、清浄な環境で生活し、都心で仕事するという健康的なライフスタイルが実現、郊外を商品として売り出す可能性を作った。「郊外」というのは、都市部から離れた場所を指すというより、新中間層が美しい環境で生活し、鉄道を利用し、都心で仕事するという健康的なライフスタイルを享受できる場所を指していると考えられ

<sup>6</sup> 若林幹夫(2001)「郊外論の地平」『日本都市社会学会年報』第19号

<sup>7</sup> 鈴木博之 (1999) 『〈日本の近代10〉都市へ』中央公論新社、229~241頁

角野幸博 (2000) 『郊外の20世紀: テーマを追い求めた住宅地』学芸出版社、36~64頁

る。

山田賢治・松田敦志（2008）「郊外の形成」にも、空間としての郊外の形成について同様の考察がある。

山本・松田によると「日本では、都市は経済発展の舞台であって、住宅をはじめとする生活環境に重点を置いてこなかった」がゆえに、「日本近代都市の形成過程において、工業化の進展と都市問題の激化の中で、勃興しつつあった都市の中産階級に良好な住宅地を提供するために、漸次郊外住宅地が形成されていった」とする。彼らによると、郊外化の実現には二つの要件がある。まずは「郊外化の主人公となった都市の新中産階級の出現」、二つ目は「郊外化を事業経営として推進した私鉄の戦略の存在」である。さらに、山本・松田は、「最初は、通勤するための費用や住宅費を負担できる人は限られており、富裕な階層の人びとがまず郊外住宅地に脱出していき、その後に次第に多くの人びとが郊外住宅地で生活をするようになっていく」と、郊外化のプロセスは、富裕なブルジョア階級から始まり、その後に大量に形成されたホワイトカラー層（都市新中間層）が都市近郊に住宅地を求めるようになると指摘している<sup>8</sup>。

本稿においては、上記の研究によって言及された「郊外」の定義を用いる。さらにそれらの研究が日本の「郊外の誕生」として想定したまさにその空間こそが、20世紀初頭から20年代にかけて作られた阪神間の「郊外」空間であり、本稿の対象とするところである。

さらに付言すれば、20世紀初頭にE.ハワードの「田園都市」論が日本に紹介されたことによって、大都市近郊に環境良好な都市をつくるという考えが日本にも生まれた<sup>9</sup>。両誌においてE.ハワードに直接言及するところはないが、間接的な影響があったことは間違いないのだろう。

## 第2節 私鉄の歴史

一方、前述の「郊外」を成立させた「私鉄沿線」の整備はいつごろから行われたのであるか。片木篤<sup>10</sup>によると、1887（明治20）年に制定された私設鉄道条例（1900年私設鉄道法となる）の下で、九州鉄道、山陽鉄道、関西鉄道、北海道炭礦鉄道などが設立された。しかし、1906年（明治29）公布された鉄道国有化によって規制が厳しくなり、その後の私鉄の出願が途絶えた。さらにその後、「鉄道国有化法と私設鐵道法下での「私鉄」の出願はなく

<sup>8</sup> 山田賢治・松田敦志（2008）「郊外の形成」浅野慎一+岩崎信彦+西村雄郎編『京阪神都市圏の重層的なりたち—ユニバーサル・ナショナル・ローカル—』22~23頁

<sup>9</sup> 日端康雄（2008）『都市計画の世界史』講談社現代新書、202~214頁

エベネザー・ハワード著・山形浩生訳（2016）『[新訳]明日の田園都市』鹿島出版会

東秀紀・風見正三・橋裕子・村上暁信（2001）『「明日の田園都市」への誘い—ハワードの構想に発したその歴史と未来—』彰国社

<sup>10</sup> 片木篤（2017）『私鉄郊外の開発と生活—空間の再編』片木篤編『私鉄郊外の誕生』柏書房

なったが、路面電車と同じ軌道条例（1890年制定、1921年軌道法となる）に準拠した「インターアーバン」（都市間電気鉄道）の敷設を目論む者も現れた」とする。阪神電気鉄道は「ほぼ全線を専用軌道とすることで、軌道条例準拠の特許を得て、1905年大阪出入橋～神戸三宮駅間を開業」させた。京阪電気鉄道も、箕面電車、兵庫電気軌道、大阪電気軌道も同様の手法で相次ぎ開業させている。

本稿の論旨に直接関わる私鉄は、1905年開業の阪神電鉄、1910年開業の箕面電車（現阪急電車・宝塚線）である。

竹村民郎（2012）は文化環境としての郊外の成立について、阪神電鉄のPR誌『郊外生活』を材料として明らかにしている。竹村によると、「阪神間についていえば、阪神、阪急、官線沿線の宅地開発の進展とともに、ゴルフ場、ホテル、宝塚少女歌劇などのレジャー施設や、個性的な美術館群が出現した。私鉄沿線の各地に宝塚音楽歌劇学校（1918年）甲南女学校（1920年）、七年制の甲南高等学校（1923年）、関西学院（1929年）、神戸女学院（1933年）などもあいついでつくられたことも、阪神間の社会的、文化的地位を高めた」として、宅地開発とともに、私立学校の存在が郊外の価値を高めたと指摘している<sup>11</sup>。

1920年代以降、私鉄沿線の郊外に、実際に多くの私立女学校が設立、または移転していくが、本稿では、それ以前に、1910年代に、阪神電鉄の広報誌『郊外生活』と箕面電車の広報誌『山容水態』において、一般の人々に郊外生活を薦める言説の中で、郊外と子ども、特に少女が関連付けて描写され、イメージされるのかを考察していく。

## 第二章 『郊外生活』と少女のイメージ

阪神電鉄は、1914年に『郊外生活』を出す前に、1908年に『市外生活のすすめ』という広報書籍を出版している。ここでは関西の医者に健康な暮らしをするために「市外生活」を薦める文書を集めている。大阪と神戸の二都市を結ぶ「都市間鉄道」として開業して3年、少なくともこの段階で明確に、その間での「郊外開発」を意識していた。

その五年後、箕面有馬電気軌道（箕面電車）も開業した後、阪神電鉄は名称も「市外」ではなく『郊外生活』として、郊外に乗客を招き、さらに定住させるために郊外の良さを広報する雑誌を刊行した。さらに箕面電車も1913年に『山容水態』を刊行するが、この両誌が、本稿の対象である「少女」や「女学生」をどのような文脈で、そして文章だけでなく、写真や絵画を通してどのように表現したのだろうか。

ただし、本稿で扱う「少女」については、これまでの少女文化研究で用いられた概念に基

<sup>11</sup> 竹村民郎（2012）『阪神間モダニズム再考』株式会社三元社、143頁。原典での西暦年の表記は漢数字であるが、本稿は横書きのため便宜的にアラビア数字で表記する。

づく<sup>12</sup>が、対象とする広報誌は少女専門誌ではないので、当時の編集側もそれを意識していたわけではないだろう。したがって、紙面上の明らかに「若い女性」とされる写真や挿絵を考察の対象としながら、「少女」性に関する考察を進めていく。

## 第1節 『郊外生活』

阪神電鉄が初の都市間私鉄として1905(明治38)年開業して、郊外の開発と乗客の誘致に取り組んだ時期、その広報誌『郊外生活』において、郊外と少女、女学生はどのように表象されたのか。

『郊外生活』には、子どもの教育に関する直接的な宣伝以外に、「少女」、「女学生」の要素が所々に出現している。『郊外生活』が刊行された1914年にはすでに「少女」という言葉が定着し、その内実も「可愛らしい」「あどけない」などに方向づけられてはいた。山戸依子によると、女学生は少女の先立つ形である。「少女はまず女学生という形で用意され、明治後期、雑誌の読者カテゴリーとして囲い込まれる形で誕生した。大正期以降増大の一途を辿る女学生層とその予備軍をターゲットに少女雑誌は成長し、「少女文化圏」ともいべき独自の領域を形作っていく<sup>13</sup>」とする。

この広報誌が出る時期には、いくつかの女学生向けの雑誌も出され上記の「少女文化圏」は形成されつつあった。ただ、本研究が扱う広報誌にまでそうした文化圏が拡大していたわけではないし、こうした研究もない。まさにこうした少女文化圏を背負う「良家の子女」たちのイメージが形成されつつあった時に、郊外の宣伝にその文化圏の要素が使用されたという点にこそ注目すべきである。つまりここでは商品としての「郊外」に少女が結びつけられたのである。

## 第2節 教育に最適な場所としての郊外

阪神電鉄は、先に触れたように、開業3年後の1908(明治41)年に、「神戸の都市内に住む富裕のサラリーマン層」向け、高田兼吉編集『市外居住のすゝめ』を刊行し、阪神電鉄沿線の「郊外(市外)」への移住を、ここでは医学の立場から勧めている<sup>14</sup>。そして電鉄経営が軌道にのった1914年には、「阪神電気鉄道の娯楽機関の経営および土地家屋の賃貸兼営」という経営方向を受けて、『郊外生活』が「今西林三郎主導のもと当時の運輸課長太宰政夫編集により1914年、1915年の2年間計22号が刊行され、太宰の阪神電気鉄道退社によって

<sup>12</sup> 本田和子(2012)『女学生の系譜・増補版:彩色される明治』青弓社  
今田絵里香(2007)『「少女」の社会史』勁草書房

<sup>13</sup> 山戸依子(2006)「日本の「少女趣味」の誕生—「少女」の共同体とその欲望—」『表現文化』第1号、107~130頁

<sup>14</sup> 黒田勇(2021)『メディアスポーツ20世紀』関西大学出版部、112頁

終了した」<sup>15</sup>。

『郊外生活』には主に「郊外生活の魅力を語るに必須と思われた「園芸」の記事や「宅地」についての記事<sup>16</sup>を掲載しているが、同時に郊外が教育に適していることも宣伝している。

『郊外生活』のほぼ毎号の扉には、阪神沿線が郊外教育の最適場所であると謳う広告が掲載されている（図1）。

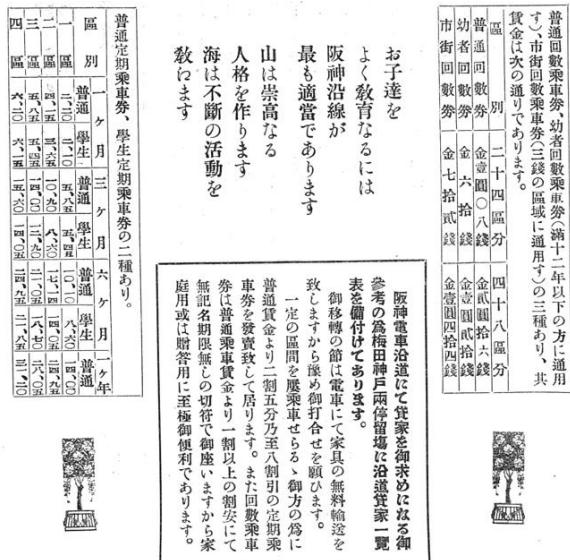
お子達をよく教育なるには阪神沿線が最も適當であります  
山は崇高なる人格を作ります  
海は不斷の活動を教えます<sup>17</sup>

阪神電車沿線への移住を勧めるために、『郊外生活』は梅田・神戸の間の沿道貸家一覧表をも備え付けている。引っ越しの際に電車で家具の無料輸送も行っている。これに合わせて、回数券の普通回数乗車券、幼老回数乗車券、市街回数

乗車券の三種と定期券普通定期乗車券、學生定期乗車券二種の運賃を紹介している。普通定期券は一ヶ月、三ヶ月、六ヶ月以外に、一年もあるのに対して、学生定期券は一ヶ月、三ヶ月、六ヶ月しかなかったが、1918年7月6日に定期券規程及回数券規程により、学生定期乗車券運賃は全て普通的乗車券運賃の二割五分引きとし、且つ従来の三種類定期券以外に一年分も設けられたと当時の新聞も報道している<sup>18</sup>。

「お子達をよく教育なるには阪神沿線が最も適當」と宣伝しているように、『郊外生活』は挿絵以外に、教育の適地としての郊外について伝えようとしている。第1巻第4号には谷本梨庵の「價值顛倒」という文章を載せている(図2)。

中には「尚ほ出來べくんば此處芦屋とか又魚崎などいふ健康第一の地に、西洋流の寄宿學校即ちポールディング・スクールが設けられたら便利と考へる、それは格別大仕掛たるを要せず、寧ろ設備周到を望む者で、主として上流の子弟の爲にする、但し一般に體質脆弱な女子には小學時代でも郊外に於て林間に教授するが可なりとは最近教育思想であれば」とある。



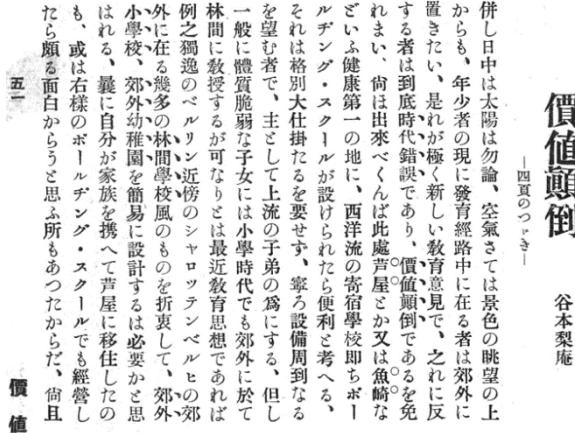
义 1

<sup>15</sup> 永藤清子(2007)「阪神電気鉄道の発達と阪神地域における郊外生活の形成」『甲子園短期大学紀要』(26)、13~20頁

<sup>16</sup> 黒田勇（2021）『メディアスポーツ 20世紀』関西大学出版部、116頁

<sup>17</sup> 郊外生活編集部(1914)『郊外生活』第1卷、第5号、扉

<sup>18</sup> 東京朝日新聞「定期回數券規程改正」1918年7月6日付



價  
値

五一

図 2

この筆者谷本梨庵とは、谷本富<sup>とめり</sup>のことであり、1867（慶応3）年生まれ、東京帝国大学文科大学でヘルバート教育学を学び、1890（明治3）年卒業。1900（明治33）年に欧州に留学し、1903（明治36）年に京都帝国大学理工科大学の講師となった。1906（明治39）年京都帝国大学文科大学の教授に就任したが、1913（大正2）年に澤柳事件で京都帝国大学を退任し、龍谷大学に転じた<sup>19</sup>。

谷本の教育思想は4期に区分できるとされ、第1期はヘルバート教育学の導入と普及の時代、第2期は国家主義教育の提唱、第3期は欧米新教育思想の導入、新教育思想理論の提唱、第4期は体系的教育学の確立である<sup>20</sup>。森山によると、谷本は理想とする教育のモデルを「田園教育舎系の理想的新学校」<sup>21</sup>に求めた。

さらに、渡邊隆信（2000）によると、ドイツ田園教育舎系起源であるイルゼンブルクの創立者リーツは「①大都市でなく田園（Land）で、②知的な教授よりも人格的な教育（Erziehung）を重視し、③通学制の学校でなく寄宿舎（Heim）において生活共同体を形成する、という3つのコンセプトに基づいて教育を実践しようとした」<sup>22</sup>。

山名淳（1998）によると、リーツの教育舎は「交通の網目が外部との接続を保証しうることを前提としてはじめて、隔離された「教育島」が演出されたのだ」と鉄道の重要性を説明している。「リーツが教育舎における教育活動の実践に関して強調するのは、まさに教育舎が物理的には大規模都市から遠くにありながら、鉄道網を利用することによってそこからの接続も容易であるということであった。大規模都市はリーツが理想的な教育の場の対極に位置する禁忌すべき場とみなされたが、教育舎における教育の対象となるべき子どもたちとして彼が想定していたのもまた、ほかならぬ大規模都市で生活する子どもたちであつた」<sup>23</sup>。

<sup>19</sup> 菅生均（1996）「谷本富の手工教育論に関する一考察」『熊本大学教育学部紀要』第45巻、117～133頁

<sup>20</sup> 森山賢一（2003）「谷本富の新教育思想——体験、手工科教育論にかかわって——」『産業教育学研究』第33号、第1号、38～39頁

<sup>21</sup> 同上、38頁

<sup>22</sup> 渡邊隆信（2000）「田園教育舎運動の史的再構成——「ドイツ自由学校連盟」の創設と活動に着目して——」『教育学研究』第67巻、第3号、322～332頁

<sup>23</sup> 山名淳（1998）「ドイツ田園教育舎にとって鉄道とは何か——ハウビンダ校の隔絶性に関する一観角」『教育新世界』第24巻、第2号、30～39頁

谷本が求めたこの田園教育舎系の学校のコンセプトは「價值顛倒」における主張と一貫したものとなっている。彼は1912（大正2）年に澤柳事件で京都大学を辞任したが、2年後の1914（大正4）年に『郊外生活』においてこのエッセイを発表した。少なくともこのエッセイを見る限り、「郊外小学校、郊外幼稚園を簡易に設計するは必要か」「ボーディング・スクールを経営したら頗る面白からう」などと、自らの研究で追及した理想の田園教育の場所を、阪神間の郊外に求めようとしていたのである。さらに付言すれば、谷本自身も読者も、そこで行われる教育を受ける「子女」たちは、都市中間層、あるいは上層の少年、少女であると想定していたであろう。

### 第3節 郊外と「少女」

『郊外生活』には、上記のような理想の教育の場としての郊外の描写だけではなく、郊外に住む少女、女学生の生活写真も掲載している。例えば第1巻第6号に医学博士の菊池常三郎が郊外に引っ越しする前とした後の生活を紹介する「西の宮に来るまでと来てからと」<sup>24</sup>という一篇が掲載されている。

菊池常三郎は、『近畿医家列伝』（1902）によれば、西宮回生病院を創設した初代院長である。彼は1881（明治14）年に陸軍省第1回委託生として東京大学医学部を卒業した。1886（明治19）年にドイツに留学し、帰国後は陸軍軍医学校外科学教員、東京衛戌病院長を兼務した。日露戦争には軍医として参加し、退職後は兄の菊池篤忠とともに回生病院を創立し、外科医長を務めた。1907（明治40）年に西宮回生病院を創設した。菊池は『実用外科各論』4巻を著し、消毒綿帯を発明した。この消毒綿帯の発明は当時の防腐外科において軍人外科的一大進歩であったとされている<sup>25</sup>。

菊池が喘息のために健康に良い永住の地を探す顛末について語った部分を以下にまとめると。

最初は浜寺にしたが風が強くて諦め、尼崎は海水が濁っているから好ましくなく、次に鳴尾から今津、今津から西宮まで歩いて探した。西宮の後も打出、芦屋、深江、魚崎、住吉、御影まで足を伸ばしたが、結局は西宮を決めたという。「武庫川から押し流された川砂が遠く海の中に突出てゐるから、大阪からの悪水はこの床にぶつかつて沖へ出てしまふ」ので、大阪の悪水が西宮には来ない。

さらに、彼は日露戦争にいく汽車の中で、「ばつたり出逢つたのが阪神電車の今西林三郎君だ、その時に今西君に向かつて早く夙川にも電車停留場を設けて貰ひたいという注文を出した處が、あの邊に住めるやうな處がありますかといつて今西君は不審相な顔をしてゐ

<sup>24</sup> 菊池常三郎（1914）「西の宮に来るまでと来てからと」『郊外生活』第1巻、第6号、2頁

<sup>25</sup> 古屋照次郎（1902）『近畿医家列伝 前編』大阪史伝会、ろ202-ろ206頁

た」が、戦争が終わって夙川に出かけてみると、今西と大林二人が既にこの近所の土地をすっかり買ってしまった。

以上のような話自体が阪神電鉄沿線の郊外を適切に紹介するものとなっているが、菊池が西宮を選んだ理由は、「まず西風が近い所の煤煙を東へ吹いていくこと、次に六甲嵐が一度裾に突き当たって、気勢が殺されてしまう」だとする。さらに、夙川の土地の話も郊外の住宅地として最適であることを暗に示す分となっている。



図 3

さて、少女についてであるが、同号において、銀冠郎という筆名の筆者が第三者の角度からも菊池の生活を紹介する「菊池博士の家庭生活　主人の園藝と夫人の養蠶」<sup>26</sup>という一篇が掲載されている。西宮での郊外生活の充実ぶりを紹介しつつ、菊池博士の娘たちの写真も掲載している（図 3）<sup>27</sup>。写真についての説明文「九頁の寫眞は令嬢、向かつて右は千代子さん、中は博子さん、左は綾子さん」

では「令嬢」という言葉が使用されている。真ん中の洋装を着ている博子はまさに少女のイメージのままである。と同時に、著名な医学者が健康的な郊外に住み、そしてそこに少女たちの図像でその健康的で豊かな生活を表現していると言えよう。

次に、中田捨松は『郊外生活』第1巻第5号の「郊外の家から妹に」という文章において、妹に郊外における生活を紹介するという形式で郊外の生活を称揚している（図4）。中田は阪神間の「郊外」のいずれかから阪神電車で神戸まで通っている。そして「その余暇には庭の草花の世話をしてその花に就いての詩や物語を調べて極めて満足な生活」をしているという。そのうえで「雪の花」についての詩を書いている。

<sup>26</sup> 銀冠郎（1914）「菊池博士の家庭生活　主人の園藝と夫人の養蠶」『郊外生活』第1巻、第6号、6頁

<sup>27</sup> 同上、9頁

此花は英國では到る處庭園を賑はして居るさうです、そして花の色は薄緑を帶びた白色で、何か心配して居る人の頬の様に人に物思はずる様な淋しい花ですが、小さき首をもたらすら擡げかねた風情は優しい心の少女にも似て、眞に人に云ふことできぬ善い感じを與えます<sup>28</sup>。

郊外の家のから妹に  
中田捨松  
兵庫縣便局

朝に夕に電車で神戸に通つてから早數ヶ月になりました。そして餘暇には庭の草花を世話しては、その花が就ての詩や物語を調べて極めて満足な生活をして居ます。春は過ぎます、すでに葉穂の美しい頃になるのでせう。此頃は小さな可愛い鳥が庭に巣立つてきました。私は鳥の名を知りませぬが村の人達はそれをヒゴださと云つてゐます。少し季節過れますが今日は雪の花に就ての詩を書きまづから讀んで下さい。

此花は英國では我る處庭園を賑はして居るさうです、そして花の色は薄緑を帶びた白色で、何か心配して居る人の頬の様に人物思はする様な淋しい花です。小さき首をもたらすら擡げかねた風情は優しい心の少女にも似て、眞に人に云ふここの出来ね善い感じと興へます。英國では私等の種云ふ人が此花を詠つた詩を次に書きます。

露けき原の誇る花  
春の綠と童貞の  
白き寒の衣着て。

図 4

ここでは、花が風に吹かれて揺れる姿を少女の比喩としているが、少女という言葉によって、「花のように可愛らしく、初々しく、潔白である」というイメージを伝えようとしたのだろう。雪の花とは、茎がすらりと伸び、小さい白い花が下向きに咲くスノードロップのことであろう。少女の恥じらいのあるイメージとの連想かもしれない。最後の詩人ジョンキーゾルは、ジョン・キーツであると考えられる。中田捨松という筆名の人物を特定はできなかったが、この妹への文を書く中田捨松が誰にせよ、この時代に英文の詩を読む知識と能力を持っていることが伺われる。こうした教養をもった人物が郊外に住み、その妹について表現することで、ここでもその妹の階層性を帯びた「少女性」と郊外が関連付けられている。

『郊外生活』には少女をイメージした挿絵が多く掲載されているが、「郊外」の文化をもっとも象徴的に表現したと思われるものが、第1巻第8号の裏表紙である(図5)。洋装のワンピースに帽子、洋式の二つ結びの髪型をした女学生たちが六甲山へとハイキングに向かう写真である。

そして、そこには女学生の会話が添えられている。

「——いゝお天氣ね！  
——そして、いゝ土曜日ね！  
——そして、いゝお山だこと！  
——私は疲れはしないでせうか？  
——疲れてもほんの少うしでせうよ。



図 5

<sup>28</sup> 中田捨松 (1914) 「郊外の家から妹に」『郊外生活』第1巻、第5号、62頁

——阪神俱樂部で休んだら、そして、お山の上のいゝ景色を一目眺めたら、私達の元氣はすぐ恢復しますわ。」<sup>29</sup>

この会話は現実の阪神間の女学生たちのものかどうかは別にして、少なくとも、当時の会話体として社会的上層の人々のものと認識されていた話法で表現されている。すでによく知られるように「女学生」の言葉は文学の中にも明治中期に出現し、次第に意識されるようになり、先述の通り女性雑誌の広がりとともに少女雑誌文化圏で広く使われるようになる<sup>30</sup>。

大阪で発行される電鉄広報誌の中でもこのような言葉づかいが使用されたことで、郊外の魅力と女学生を節合させようとする意図は見て取れよう。

他にも、第1巻第7号の40頁の挿絵は洋装のワンピースの女性二人が阪神沿線大石の海岸を散歩しているような写真である（図6）。このうちの右側の女性は成人女性のように読み取れる。左の若い女性も先の女学生たちよりもすこし上の年齢かもしれない。先の女学生が活発に山に向かいハイキングをしているのに対し、海辺で散策、あるいは佇むように見える姿からは、落ち着きを読み取り、読者は、その落ち着きと服装から見て裕福な階層の若い女性であると読み解くかもしれない。どちらにしろ、郊外の山や海という景色の中に少女、あるいは若い女性を配置することで、その自然の豊かさと清純さ、健康さなどを節合させようとした図像であると言えよう。



図6

#### 第4節 挿絵の中の少女

『郊外生活』の中には、郊外という文脈と直接関係がないと思われるがいくつかの「少女」や子どもの絵が掲載されている。

<sup>29</sup> 郊外生活編集部（1914）「六甲へ」『郊外生活』第1巻、第8号

<sup>30</sup> 中村桃子（2006）「言語イデオロギーとしての『女言葉』－明治期『女学生ことば』の成立－」日本語ジエンダー学会編『日本語とジエンダー』ひつじ書房、121～138頁



図 7

まず、第一巻第五号、八号、九号、さらに第1巻第4号の裏表紙では、踊っている少女、花を見て憂いを見せる少女の挿絵を掲載している（図7）。それが少女であると読者が意味づけることができる原因是、花、トンボ、蝶々などのモチーフと、踊っている活気あるポーズなどからと考えられる。この意味作用について神野由紀（2014）は、『少女の友』（1909年～1955年）『それいゆ』（1946年～1960年）『ひまわり』（1947年～1952年）333冊の少女雑誌を調査し、「挿絵の衣服やインテリアなどに描かれた模様は、花柄、動物、フルーツ、リボンなどが多く見られ、さらに星柄やドットなどがこれに続いた」と指摘している。

『郊外生活』に掲載されたそれらの模様について、以下、神野の議論にしたがって考察する。花模様については、「少女＝可憐に咲く花というイメージ図式は、古屋信子『花物語』に代表されるように、繰り返し少女雑誌に登場する。中原淳一も、花言葉、花占いなど、花にまつわる付録を多く制作している。特に様々な洋花は、それまでの古風な花鳥風月とは異なるイメージをつくりだし、可憐な少女の象徴としてイラストの少女の背景や紙製品の模様として頻繁に用いられ」<sup>31</sup>たとしている。さらに、フルーツ模様も「当時少女を表す色であった赤色、そしてその丸味を帯びた単純なフォルム、甘いイメージなどが、少女を表象するのに適していた」<sup>32</sup>としている。

一方、動物模様については「可愛らしく単純化され、幼児性を帯びた形態となっている。少女期それ自体、幼児から大人へ移行する間の猶予期間として位置付けられ、肉体的に成熟してもなお、大人に組み込まれることを拒むという、特殊な時期あると考えるなら、少女たちの大人になりたくない心理をよく表している」<sup>33</sup>と考察している。

以上の神野の議論は、1909年代以降の「少女雑誌」の分析であるが、その最初期の電鉄

<sup>31</sup> 神野由紀（2014）「近代日本における少女的表象の生成について－商品デザインの特徴分析から－」『デザイン理論』第63号、17～32頁

<sup>32</sup> 同上

<sup>33</sup> 同上

の広報誌においても、扉頁の挿絵も花、蝶々などのモチーフ、丸みを帯びた絵画の線などを通じて少女性が表現され、利用されていたと考えていよいだろう。

このような挿絵は、ほかにもいくつかの例がある。『郊外生活』第1巻第6号の「小供のうた」の挿絵、第2巻第6号の「子供の唄」の挿絵と第2巻第8号の「十五夜のお月様」の挿絵である（図8）。ここでは、これまでに紹介した西洋的な少女の挿絵とは異なり、着物を着た「子ども」の姿が描かれている。ただ、これにしても、従来の「童歌」ではなく、「子供のうた」としている点で<sup>34</sup>、その後の「赤い鳥運動」にもつながる新たな「子ども」観や教育観を垣間見ることができる。



図8

## まとめ

さて、『郊外生活』の中にはどのような「少女」像が描かれたのかをまとめる。まず、少女たちは、菊池などの知識人あるいは新中間層の家庭の「子女」であり、西洋式のドレスを身に纏っている。「少女」はモダンで、ファッショனにも関心があるものとして描かれる。さらに、登山、ハイキング、散歩など身体的な動きにも「少女」は結びつけられ、生き生きとして、健康的な印象を与えている。「少女」の挿絵には、蝶々、リボン、花などのモチーフが添えられ、踊っているポーズからは繊細、脆弱さではなく、快活なイメージを作り上げている。

このように、『郊外生活』はモダンで健康的な少女像を表現し、一方で「少女」の活動を保証する空間として、澄んだ空気と豊かな植物のある自然豊かな郊外を提示する。こうして「少女」のイメージと「郊外」のイメージが結びつけられ繰り返し表現されることによって、「健康」「快活」「清潔」などの意味が両者で共鳴することになったのである。

<sup>34</sup> 周東美材(2015)『童謡の近代』岩波現代全書

### 第三章 『山容水態』と少女イメージ

『山容水態』ははじめ 1912（大正元）年 9 月に単独刊行の写真集として発刊、のち 1913 年 7 月より月刊誌化された。箕面有馬電気軌道沿線の住宅地宣伝、販売するための『山容水態』は、『郊外生活』のように園芸などの郊外での生活に関する記事ではなく、主に箕面電車沿線住宅地の売却を目的とする記事広告を多く掲載している。宅地の予約売却、貸家の紹介、電車賃金割引、新築落成案内などの広告が随所に見られる。

阪神電鉄の『郊外生活』が郊外に移住した都市「中産階級」の家庭生活の様子を主に紹介するのに対して、『山容水態』は俳句和歌、伝統文化に関する記事、名士の回遊エッセイなどを通じて郊外への移住を進めるが、ここでは健康志向だけではなく、「風雅」であることも強調している。『山容水態』においては家庭、子どもに関する内容は多くはなく、これが『郊外生活』との大きな違いとなっている。

#### 第1節 『山容水態』に描かれた女性の特徴

それでは前章で明らかにした「少女」性はどのように表現されたのだろうか。『山容水態』には若い女性の写真及び挿絵も掲載しているが、これらの写真と挿絵は、『郊外生活』における少女と女学生の写真とは違い、和装の女性を主に描いている。例えば、1913 年 11 月号の 2 頁（第 1 卷第 5 号）「みのおのもみぢ」には着物を着た女性の写真 2 枚が掲載されている（図 9）が、左は、晴着を着た女性と少女、右の「箕面公園瀧見茶屋」では袴姿の女学生が写っている。



図 9

1914 年 2 月号（第 1 卷第 8 号）の裏表紙に舞妓の写真があり、3 頁には「寶梅園」の紹介として梅の枝を持っている若い女性の写真がある（図 10）。

これらの写真に登場する女性はすべて和服である。郊外の自然溢れた行楽地を紹介する際に、そこに女性を配置する手法は『郊外生活』と変わらないが、その女性たちは和装であり、『郊外生活』に描かれた躍動的な若い女性たちとは対照的である。



図 10

これについては、多くの表紙画と挿絵を担当していた森田久の絵からも、『山容水態』の特徴を考察することができる。森田久は若い娘を主題とする絵を多く描いている。例えば1915（大正4）年10月の第3巻第4号の裏表紙、同年11月の第5号の挿絵「紅葉狩」、1916（大正5）年1月の第7号の挿絵「寶塚圖書室にて」、同年6月第10号の裏表紙及び挿絵「涼しき夕」、いずれも着物を纏う和風の女性である（図11）。

森田久は『山容水態』だけではなく、1918（大正7）年『歌劇』が創刊されてから1925（大正14）年まで多くの表紙画及び挿絵を担当し、また、宝塚少女歌劇団の舞台装画も担当していた。『歌劇』における森田の絵は洋装のモダンな少女が多いのに対し、『山容水態』においては物静かな和風の女性が多い。少なくとも、1918年までの『山容水態』刊行初期においては、女性は和装で描かれるというのが特徴と考えてよいだろう。

ただ、これらの挿絵では和装であっても伝統的な日本髪は一枚だけで、若い女性にとっての流行の髪型で描かれ、さらに、図書室で本を読む少女、紅葉を鑑賞する少女など、教養ある階層の女性のイメージを表現している。



図 11

## 第2節 郊外住宅としての池田

小林一三は、箕面電車の郊外開発の手始めとして池田の「室町住宅」に分譲住宅を販売している。津金澤は「小林一三は別荘族のぜいたくを批判し、これらは対象外として、むしろより所得の低い中流層の潜在需要をいかに引き出すかに狙いをつけ、期待をかけた」<sup>35</sup>と評価しているが、以下の掲載記事から見ると、やはり高級で文化的な郊外住宅の生活を描いている。その中で、文化的な郊外生活を表現する際には、やはり若い女性は大きな役割を果たしている。

その中では、『寶塚の歌劇少女』(1923年)の編著者である橋詰せみ郎が筆名「せみ郎」として「池田の京こゝろ 室町にて<sup>36</sup>」という文を書いている。

水は澄み切つて、イモリの横腹から脇入れのやうな赤いのがチラチラ見える、朝稽古の合せ琴が低く、高く、隣の家から響き出した、暑がりの鶴ちやん千代ちやんと思はれぬま

<sup>35</sup> 津金澤聰廣(2018)『宝塚戦略 小林一三の生活文化論』吉川弘文堂、68頁

<sup>36</sup> せみ郎(1913)「池田の京こゝろ 室町にて」『山容水態』第1巻、第3号、4~5頁

でに涼しい音色だ……秋艸の露しげくおつる、木の葉の梯に、積れと誰れかわらはん…  
…、秋意既に此少女をも動かして、早くも秋の吟をなしめて居る、實にも實にも静かな朝の此の色、此の氣、ヤツパリ池田は攝北の京都だと私はひとり口吟ながら歩き出した

このように、「室町住宅」の様子を、隣の家の少女たちの朝稽古の琴の音などに触れ、その風景を好ましい郊外の姿として描いている。さらに、自然の豊かさに加えて文化的な町であることも強調し、池田の地を「北摂の京都」ともちあげている。

さらに、『山容水態』(第3巻第3号、1915年9月)でも、松本弦山の「池田から」という随筆を掲載している。ここでは、「少女」という言葉は使用していないが、女性を花に例えている

センチメンタルな S 君ならずとも人に花を擬へ、花に人を偲ばずには居られません。  
——私は最近、極めて純な意味に於て此の池田から美女傳中の人として三人を擧げたことがあります、六番丁の佐々木庸子夫人、七番丁の太田千代子嬢、二番丁の吉岡千種嬢、其の中、千代子さんには一度、庸子さんには二度、千種さんには三度お目にかかりて泌々然う感じたのですがこれを今いつた三つの花に例へますれば果して純が何の榮ある花を引き當てるでせう乎。

(中略)

千種さんのかう無邪氣で饒舌なところは眼覚めたばかりの朝の小鳥に似、姿は云ふまでもなく紫の朝顔の、露の香の涼しく潤んだ双眸には浪速畫壇の才媛として無限の希望が輝いて居ります。その繪皿に浸けた筆の穂を、朝顔の蕾と見るのも恰好であります<sup>37</sup>。

上記の文章は単に室町に住む美人たちを花にたとえて称賛しただけではない。なかでも、吉岡千種を才能ある美術家として取り上げている。千種は1895年に大阪市に生まれ、米国に留学後、府立清水谷高等女学校に在学、東京で3年間池田蕉園に師事した後、1915年に帰阪した。この記載は、池田・室町にある叔父の吉岡重三郎の家に住み、文展出品の《針供養》を製作していた頃である<sup>38</sup>。彼女の叔父の吉岡重三郎は当時の箕面電車に所属し、豊中グラウンドで全国中等学校優勝野球大会実施の発案者の一人で、のちに宝塚歌劇団の会長を務めた。

<sup>37</sup> 松本弦山 (1915) 「池田から」『山容水態』3(3)、32頁

<sup>38</sup> 池田市立歴史民俗資料館編 (2002) 『女性日本画家木谷千種—その生涯と作品—平成14年度特別展』池田市立歴史民俗資料館

このように、「池田から」においては、美しい女性三人が住む町として池田という郊外の住宅地の価値を強調している。とりわけ、吉岡千種についての描写は、無邪気で、澄んだ瞳を持つだけではなく、モダンで、聰明で、芸術気質のある少女のイメージを強調することで、それと郊外の自然の豊かさや清潔さを節合しようとしている。

### 第3節 『山容水態』の中の宝塚少女歌劇団

『山容水態』は箕面電車沿線全体の広報誌であり、宝塚少女歌劇団の公演等について取り上げられることは当然として、随筆や論壇としての記事は多いとは言えない。

本論に関わる「少女性」の文脈からは、雲井浪子がマンドリンを弾いている写真付き（図12）のマンドリンを紹介する「夏の音楽<sup>39</sup>」、及び宝塚少女歌劇団には音楽学校を設立する必要性を唱える「少女歌劇を観て<sup>40</sup>」などの文章がある。

このなかで、宝塚少女歌劇団のメンバーの一人、雲井浪子が西洋式のドレスを身に纏い、南国情緒の象徴としてのマンドリンを演奏する姿の写真を添えている。この雲井浪子の写真はまさに近代的、西洋的で、モダンな少女を表現している。雲井浪子は宝塚少女歌劇団の一期生であり、宝塚少女歌劇団の初公演『ドンブラコ』にも出演した歌劇団を代表するスターであった。この写真は宝塚のモダンで西洋的な「少女」性を初めて表現した写真でもあり、また、和装中心の若い女性が登場する『山容水態』では珍しい写真といえよう。その意味では、宝塚少女歌劇団の「少女性」を西洋的でモダンなものに方向づけていく象徴的な写真であったとも言えよう。



図

### まとめ

以上のように、『山容水態』においてはモダン少女の挿し絵、写真および「少女」という言葉自体に関する言及が少ないが、知性と知識を持ち、芸術に関心のある若い女性のイメージは継続的に表現され、それが、箕面電車が展開する郊外の行楽地や住宅地と節合されている。さらに、『山容水態』は名士の俳句、エッセイなどを掲載し、沿線郊外が文化芸術の雰囲気をもったスペースであることもあわせて強調されることになる。

阪神間郊外建設に積極的に携わる二つの会社箕面電車と阪神電鉄の広報誌『郊外生活』と『山容水態』において、「少女」はどのように描かれているかを以上の資料で考察した。『郊

<sup>39</sup> XYZ(1914)「夏の音楽」『山容水態』第2巻、第1号、17頁

<sup>40</sup> 北里龍堂(1915)「少女歌劇を観て」『山容水態』第2巻、第7号、9~10頁

外生活』はモダン的「少女」を描いているのに対し『山容水態』は和風ではあるが、知性と審美眼を持つ先進的な「少女」のイメージを描いている。「少女」に関する描写の仕方が違うにせよ、両誌が郊外における生活の良さを宣伝する際に、「少女」に注目していた事実は同じである。

### おわりに

本稿では、宝塚少女歌劇団が郊外で成立したことを考察する前提として、「少女」と「郊外」の親和性という角度からの考察を試みた。そのために、電鉄会社の広報誌を材料として「少女」に言及する写真、挿絵及びエッセイなどを分析し、「少女」がいかに描かれたか、「少女」と「郊外」がいかに結び付けられ、意味付与されていたのかを考察した。そこでは、「少女」が健康、清潔、快活という意味をもって「郊外」と共鳴していたことを明らかにした。本稿はじめて記したように、阪神間モダニズムに関する従来の研究では、竹村民郎が郊外についての考察の中で女性の存在に触れているが、彼は主婦層の消費生活と文化生活の在り方に注目しており、郊外と少女あるいは女学生の親和性について目を向けたものではなかった。また、少女文化論の中では都市の中の少女は自明の存在として語られるが、大都市郊外という空間の特殊性と少女を結び付けた研究はなかった。本稿ではこの点に改めて目を向けて、考察を試みたものである。

### 参考文献

- 東秀紀・風見正三・橘裕子・村上暁信(2001)『「明日の田園都市」への誘い－ハワードの構想に発したその歴史と未来－』彰国社
- 永藤清子(2007)「阪神電気鉄道の発達と阪神地域における郊外生活の形成」『甲子園短期大学紀要』 第26巻
- 古屋照次郎(1902)『近畿医家列伝 前編』大阪史伝会
- 日端康雄(2008)『都市計画の世界史』講談社現代新書
- 日枝智樹(2017)「世界の広報史と日本」『広報研究』第21号
- 本田和子(1990)『女学生の系譜・増補版：彩色される明治』青弓社
- エベネザー・ハワード著・山形浩生訳(2016)『〔新訳〕明日の田園都市』鹿島出版会
- 池田市立歴史民俗資料館編(2002)『女性日本画家木谷千種－その生涯と作品－平成14年度特別展』池田市立歴史民俗資料館
- 今田絵里香(2007)『「少女」の社会史』勁草書房
- 神野由紀(2014)「近代日本における少女的表象の生成について：商品デザインの特徴分析」

から」『デザイン理論』第 63 号

角野幸博(2000)『郊外の 20 世紀—テーマを追い求めた住宅地—』学芸出版社

片木篤(2017)「私鉄郊外の開発と生活—空間の再編」片木篤編『私鉄郊外の誕生』柏書房

黒田勇(2021)『メディアスポーツ 20 世紀』関西大学出版部

三島万里(2016)「広報誌を読む」文化学園大学紀要 47 集

森山賢一(2003)「谷本富の新教育思想—体験、手工科教育論にかかわって—」『産業教育学研究』第 33 卷、第 1 号

中村桃子(2006)「言語イデオロギーとしての『女言葉』—明治期『女学生ことば』の成立」

日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』ひつじ書房

周東美材(2015)『童謡の近代』岩波現代全書

菅生均(1996)「谷本富の手工教育論に関する一考察」『熊本大学教育学部紀要』第 45 卷

鈴木博之 (1999)『<日本の近代 10>都市へ』中央公論新社

竹村民郎(2012)『阪神間モダニズム再考』株式会社三元社

津金澤聰廣(2018)『宝塚戦略 小林一三の生活文化論』吉川弘文堂

若林幹夫(2001)「郊外論の地平」『日本都市社会学会年報』第 19 号

渡邊隆信 (2000)「田園教育舎運動の史的再構成—「ドイツ自由学校連盟」の創設と活動に着目して—」『教育学研究』第 67 卷、第 3 号

山田賢治・松田敦志(2008)「郊外の形成」浅野慎一+岩崎信彦+西村雄郎編『京阪神都市圏の重層的なりたち—ユニバーサル・ナショナル・ローカル—』

山名淳(1998)「ドイツ田園教育舎にとって鉄道とは何か—ハウビンダ校の隔絶性に関する一視角」『教育新世界』世界新教育学会、第 24 卷、第 2 号

山戸依子 (2006)「日本の「少女趣味」の誕生—「少女」の共同体とその欲望—」『表現文化』第 1 号

吉田容子(2006)「地理学におけるジェンダー研究—空間に潜むジェンダー関係への着目—」『E-journal GEO』第 1 卷

東京朝日新聞「定期回數券規程改正」1918 年 7 月 6 日付

『郊外生活』郊外生活編集部、1914 年～1915 年、計 22 号

『山容水態』箕面有馬電気軌道、1912 年～1917 年、計 37 号